



ArCS 若手研究者海外派遣支援事業 実務者短期派遣支援 終了報告書

氏名： 前野 泰孝

参加会議・コース名称

2019 ARCTIC FRONTIERS SMART ARCTIC

■ 派遣中の活動と成果

〔派遣中に参加した会議・コースの概要と、得られた知見や成果を記述してください〕

はじめに

2019年1月20日～25日にノルウェー トロムソ市にて開催された ARCTIC FRONTIERS 2019に参加し、北極圏における文化や自然環境の保護、北極海航路、燃油問題等のスペシャリストを迎え、直面す課題等を北極圏域にある国だけではなく、シンガポールを含むアジアの国々も入れて議論し諸問題に対して各国がどの様に関わって行く事ができるかを知る機会となった。特に海洋環境問題は、当地だけに限らず世界の全ての海に面した国の関心事項であるため、特にこの自然環境を守らなければならない北極域での活動が世界の海に広がる事を期待した。

Plenary では、アラスカ州選出上院議員や、ノルウェーの外相を含む各国の北極域に属する地域の代表からのスピーチに始まり、パネルディスカッションへと移行して行く。各代表者は、各国の考え方の違いこそあれ、利害関係国としての行動や考え方は根底では一致しており、この環境を如何にして守るのか、この環境において如何にして持続可能な事業を展開していくのかについて活発な意見が交わされた。特に、シンガポールの Mr. Sam Tan 内相を含む赤道直下の国や中国等のパネリストからの意見については、投資するだけではなく、その国が持つ物を北極圏にどの様にして投下していくかという話が興味深かった。

① Arctic Frontiers 2019 Plenary Session VII “Arctic seaways”において、Hurtigruten 社 CEO の Daniel Skjeldam 氏が発した Local Value Creation という言葉は、我が国のクルーズ船の受け入れ環境、特に地方港において整備するにあたり、非常に参考になる言葉と感じた。Skjeldam 氏は自身の仕事である船舶運航を汚い(dirty)仕事と例え、運航は黒い煙を吐き自然環境への脅威となり、多くの観光客を限られた受け入れ環境である地方港に連れてくると述べた。この様な汚い仕事と形容される状況とは縁を切り、より現地の環境や寄港地に寄り添った運航をすべきであると考えていた。トロムソを含む北極圏には守らなければならない自然や文化があり、またそれに期待する観光客も多くいる。この両者のバランスを取る事がまず重要とのことだった。この Local Value Creation を日本的に言い換えれば「地方が主体となり作り上げる地方港の価値」となるだろう。それは、その土地に住まう人々の生活や、その土地固有の自然を壊す事なく、持続可能な観光客の受け入れということになる。これは、現在函館港が検討を進めている「地方港がやるべきこと」というソフト面の整備についてのテーマと合致している。北海道には、北極圏同様に守らなければならない自然や文化が存在し、受け入れ環境にも限界がある。それをどの様にして守り、どの様に生かし、どの様に寄港するクルーズ船や乗客に魅せるか、今後の北極圏やトロムソ港との交流において見出し

て行く必要があると強く感じた。

② Arctic Frontiers 2019 Side Event の”The Arctic Fuel Menu and Northern Sea Route”において、北極海航路についての発表があった。まずは、今後ロシアによる砕氷船の入れ替え等が進み、次に多国間でコンテナ、天然ガス等の国際輸送の枠組みが検証されれば、本格的な商用運航ルートが策定されるだろう。但し、この砕氷船が原子力推進を続けるとなれば1つの事故が地球環境を巻き込む大事故に繋がる事も考えておかなければならないのではないだろうか。砕氷船の入れ替えについては、原子力推進の他に液化天然ガス運航による船舶の建造も発表された。原子力推進船舶の事故のリスクを押さえ、且つ環境に配慮した物となることを期待したい。また、燃油についてはIMOの燃油規制が我が国でも2020年1月から始まる。液化天然ガス等の環境配慮型のクリーンエネルギーへの転換を前に、北極圏の諸国から我が国が学べることはまだ多くあるのではないかと感じた。

③ Science for kids は、海の清掃をきっかけとして、幼稚園児の環境問題に対する意識を醸成させるものであった。プラスチック製のゴミを海岸で収集するという発表では、幼少の頃から自分たちの海について考えるための活動が紹介された。保護者からの聞き取りでは、この取組の際は、保護者や保育士からは答えを言わず、一緒になって考えるということだった。また会場となったサイエンスセンターは、幼児が科学の入り口に立ちやすく、遊びながら科学を学べる様な施設となっていた。

おわりに

今回の参加により、北極圏は遠くの寒い所ではなく、遠くとも北海道と共通する多くの物を持っている場所という認識を持つことができたことは、今後の函館港の活性化を考える上で有益であり、参考となり得る物であった。北海道大学 北極域研究センター、ArCS 若手研究者海外派遣事業のご担当には、今回の機会を与えて頂いたことに深く感謝をしたい。

追記

ノルウェーは現在、昆布の養殖実験を行っており、それは現在まで函館市南茅部地区における手工業的な真昆布の養殖作業の機械化を目指している物であった。残念ながら今回の Arctic Frontiers 2019 での発表が急遽中止となってしまったため、深く状況を知る事は叶わなかったが、在ノルウェー日本国特命全権大使である田内正宏氏との間でノルウェーでの昆布養殖事業と昆布の可能性を話し合い、東端の南茅部と西端のノルウェーとの間で昆布を使って交流を深める事ができるのではないかと意見交換ができ、大使館の交歓会にて南茅部産の昆布を紹介頂けたことは、今後の交流にとっても一つの収穫と考えている。

トロムソ港旅客ターミナルの状況や船舶の受け入れについてトロムソ港の港湾管理者 Tromso Havn を訪問し、1月23日には概要説明を頂き、翌24日には Port Director とランチミーティングを行い、継続して協力関係を築きたいとの依頼を受けた。Hurtigruten の言う内容と港湾管理者の理解が一致しており、民間会社と港湾管理者が北極圏の運航と自然・文化の保護、そして地域への経済効果への考え方を十分に共有していることがわかった。

■ 派遣支援期間中の研究発表・受賞・アウトリーチ活動

[派遣中に会議等での研究発表・受賞・アウトリーチ活動があった場合、概要を記述してください]

※図表・写真等を含めて構いません。最大2ページで作成してください。